中部学院大学・中部学院大学短期大学部　研究紀要第18号（2017）113－118

研究ノート

児童養護施設における社会自立に関する課題
― 大学等進学について ―

Issues of Social Independence in Children's Care Homes
― About Continuing on to Higher Education ―

平 松 喜 代 江
Kiyoe HIRAMATSU

抄録：本研究では、高校卒業の児童養護施設退所者の進路及び大学等への進学希望者数と実際の進学者数を全国高校卒業者と比較検討した。高校卒業後の進路状況の推移や大学等への進学希望率と進学率については、公表されている資料を用いた。さらに、児童養護施設退所者の進路選択のプロセスをとらえ、大学等進学のための進路選択に関わる支援の状況を明らかにすることとした。進路選択のプロセスを捉えるため、半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。その結果、大学等への進学希望者数が少ない要因の一つに、「施設の先輩の進路モデル」が関係していることが捉えられた。そして、進学を最初から決意していたわけではなく、施設職員とのたまたまの出会いによって進学を希望したことがわかった。また、進学に関する社会資源の情報を施設職員が把握しそれの活用まで導いていけるかが子どもたちの進路に大きな影響を与えていると考えた。

キーワード：児童養護施設、社会自立、大学等進学、進路選択のプロセス、進路支援

1．問題と目的

厚生労働省の発表によれば、2015年度児童相談所で扱った児童虐待相談件数は103,260件であった。本調査を始めた1990年の相談件数は1,101件に過ぎなかったが、以後その件数は増加の一途をたどり、遂に過去最多になった。相談件数の増加は、心理的虐待の増加によるとみられている。この心理的虐待の要因の一つは、児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力であると報告され、子どもたちにとって家庭は、最も安全で安心してくつろげる場所ではなくなっている場合があると考えられる。このような心理的虐待などを理由として家庭で過ごすことができない子どもを社会的に養護する役割をもっている福祉施設の一つとして児童養護施設がある。児童養護施設には、その他には養育放棄、保護者不在や保護者から虐待を受けているなど好ましくない生活環境上養護を必要とする子どもたちが入所し、乳幼児時期から高校卒業時期まで暮らせるが、原則として高校卒業と同時に退所しなくてはならない。子どもたちの心身の発達や個人の達成課題の状況に関係なく、決められた退所年齢に達して退所する（加藤，2003）。また選択した進路によっては決められた年齢以下でも退所することとなる。具体的には、中学校卒業後の進路として就職を選択した場合である。退所すると、保護者のもとで生活を再スタートさせる場合や、社会人として一人暮らしを開始し自立を強いられる場合がある（谷口，2011；加藤，2003）。問題があって保護者から離れて施設に入所したにもかかわらず再び保護者のもとで生活する場合や、退所後直ちに一人暮らしを強いられるなど退所者たちはそれぞれ問題を抱えている。そのために児童養護施設退所後の進路が問題になる。

そこで本研究では、高校卒業の児童養護施設退所者の進路の実態を明らかにし、大学に進学した退所者から進学に至る経過をインタビュー調査によって聴取した結果から、大学等進学のための進路選択に関わる支援について考察することを目的とした。

2．方　　法

高校卒業後の進路状況は公表されている資料を用いた。インタビュー調査は以下のように行った。

(1) **調査協力者**　社会的養護のもとで暮らす高校生対象の大学等助成制度説明会に児童養護施設退所者で大学等へ進学した先輩の立場からアドバイザーとして参加した３名を調査協力者とした。

(2) **調査時期**　調査は2016年８月に実施した。

短期大学部幼児教育学科

(3) **調査手順**　協力者に対してインタビュー調査を実施した。インタビュー調査は、半構造化面接の形式をとり、約１時間行った。面接は本人の了承を得てＩＣレコーダー（V-822-WHT、OLYMPUS）に録音した。

(4) **調査内容**　①児童養護施設入所中、②大学在学中、③現在の３つの時期に分けて、それぞれの生活状況について可能な限り自由に話してもらうこととした。

(5) **分析**　録音された記録は再生して逐語録を作成した。作成された各協力者の逐語録を①将来像の生成支援、②将来像の拡張支援、③将来像の実現支援に分けて検討することにした。

３．倫理的配慮

調査協力者には本研究の目的と内容、倫理的要項について書面および口頭にて説明し、同意を得て行った。また、本研究は中部学院大学倫理審査委員会（受付番号：E16-0018）の承認を得た。

４．結果と考察

(1) 高校卒業児童養護施設退所者の進路

2009年度から2013年度の高校卒業（高卒）の児童養護施設退所者と全国高校卒業（全高卒）者の進路状況を表１に示した。全高卒者の進学率は70％台、児童養護施設退所者の進学率は20％台で推移し、それぞれの年度による差は殆どみられない。またそれぞれの就職やその他についても年度による差はみられない。

ところが、高卒の児童養護施設退所者と全高卒の進路状況を比較してみると顕著な差がみられた。2013年度の進学率は、児童養護施設退所者が22.6％に対して全高卒者が76.9％、就職率は児童養護施設退所者が70.9％に対して全高卒者が17.4％、その他は児童養護施設退所者が6.4％に対して全高卒者が5.7％と進学率に大きな差が生じている。この大きな差はいずれの年度でもほぼ同じである。

大学等に進学すればすべてが自立に結びつくとはいえないが、進学率に大きな差が生じていることについては慎重に検討する余地があるように思われる。特に、児童養護施設退所者の進学へのニーズとの関連で考える必要があろう。

児童養護施設退所者と全高卒者の大学等への進学希望率と、進学率および実現率を表２に示した。また参考として高校進学の実現率を示した。全高卒者の大学等進学を希望する進学希望率は86.7％で、進学率は53.8％で、希望率より32.9％低くなっており、その実現率は62.0％だ。一方、児童養護施設退所者の大学等進学を希望する進学希望率は27.0％で、進学率は11.4％で、希望率より16.6％低く、実現率は42.2％だ。大学等進学実現率をみると、全高卒者では62.0％、施設退所者では42.2％となっており、全高卒者の６割が大学等進学を実現しているのに対して、児童養護施設退所者の実現率は５割を下回っている。児童養護施設退所者の大学等進学の実現率の低さがわかる。

表１　児童養護施設及び全国の高卒者の進路状況（％）

	年度	2009	2010	2011	2012	2013
施設	進学	23.1	23.0	22.0	22.6	22.6
	就職	67.1	69.5	70.4	69.8	70.9
	その他	9.8	7.5	7.6	7.6	6.4
全国	進学	75.5	77.3	77.0	76.9	76.9
	就職	18.0	15.7	16.2	16.9	17.4
	その他	6.5	7.1	6.8	6.3	5.7

注）資料は厚生労働省「社会的養護の現状について」2016

表２の示された結果で注目されるのは、児童養護施設退所者の大学等進学希望率が27.0％と著しく低いことである。全高卒者の進学希望率86.7％の３分の１に過ぎない。このように児童養護施設退所者の大学等進学希望率が全高卒者に比べて極めて低い。このことが、大学等への進学を妨げる要因になっていることが考えられる。この要因を明らかにするとともに、具体的な支援の実態を探るためにインタビュー調査を試みる必要がある。

表２　高校及び大学等への進学希望率．進学率と実現率（％）

		進学希望率	進学率	実現率
高校	全国中卒者	94.5	98.4	104.1
	児童養護施設	85.0	95.4	112.2
大学	全国高卒者	86.7	53.8	62.0
	児童養護施設	27.0	11.4	42.2

注）表２の数値算出資料は、厚生労働省「児童養護施設入所児童等調査結果の概要」2013、厚生労働省「社会的養護の現状について」2014、ベネッセ教育総合研究所「第５回学習基本調査」2015、である。

(2) 大学進学児童養護施設退所者の経過と支援について

調査協力者３名からのインタビューをもとに、児童養護施設入所児の進路選択のプロセスについて述べる。

調査協力者の属性は、年齢はいずれも20歳代であり、３名とも４年制大学に進学している。以下、カギカッコ「　」は調査協力者自身の語りである。なお、協力者の語りについては３つの時期に分けて話してもらったが、いずれもその時期における将来像の語りが主流であったため、設定した時期ごとの語りとして整理することは困難であった。そのために語りの内容から①将来像の生成支援、②将来像の拡張支援、③将来像の実現支援に分けて検討することにした。

(1) 将来像の生成支援（表３）

協力者ＡおよびＢの語りから、将来の希望を入所当初からもっていたことがわかる。具体的には、漫画家や画家、ケーキ屋と将来への希望をもっていたことがうかがえる。

一方、協力者Ｃは、子どもの頃の夢はまったくなかったとしており、その理由を「憧れられる存在がないと夢ってできないのかなと思う」と語っている。この語りから、適切に将来像の生成支援が行われていなかったことがうかがえる。

表３　将来像の生成に関する語り

協力者A	「小学生の時、絵や音楽がすごい好きで、漫画家や画家になりたいとかって」でも、高校進学した頃には「施設へ入っていると大体みんな就職しているから自分も就職するだろうと、そんな感じで思ってた」
協力者B	「きっかけは覚えてないけど、小さい頃からケーキ屋さんになりたいな」って言ってた。「それまでは、大学進学というか製菓の方の専門学校に進みたかった、入所前までは」「高校時代は、大学進学のためにとか、そういうことは考えていなくて、とりあえずテストで赤点をとらないようにと思ってた」。
協力者C	「やっぱり、家が経済的にあまりよくなかったんで、私的には就職なのかなと漠然と思ってて、あんまりビジョンはなかったんですけど」 小さい頃の夢はまったくなかった。「憧れられる存在がないと夢ってできないのかなって思った」。

さらに、このような将来への希望をもっていながらも、児童養護施設での生活やその周りの先輩たちの進路を目の当たりにして、「施設へ入っていると大体みんな就職しているから自分も就職するだろう…」「家が経済的にあまりよくなかったんで、就職なのかな…」と将来の希望とは別に諦めのような現実的な進路選択へと変化していったことがわかる。このような変化は、協力者Ｃの語りにもあった「将来への希望」と「憧れる存在」の有無が関係している。この場合は、「将来のモデルとなる先輩の存在」が影響して「高校卒業後は就職する」という進路の変化につながったと考えられる。自分のおかれている状況・環境によって進学を諦めており（吉村，2011）、前述した語りのように「施設へ入っていると大体みんな就職しているから自分も就職するだろう…」という心理的な変化が、大学等への進学希望を低くしていることと関係があるのではないかと考える。

(2) 将来像の拡張支援（表４）

協力者ＡやＢは、たまたま相性が合う職員との出会いをきっかけに将来就きたい職業（ロールモデル）と出会うことができた。この職員との出会いを一つのモデルとして施設職員への進路選択をしている。このことは、施設で育ったこと、更には自己を肯定的に受け止め始めた（越後，2011）とも考えられる。

表４　将来像の拡張に関する語り

協力者A	高校の時に、将来どうしようと思っていた頃に、「めぐりあわせが良かったのか、高2の頃担当の児相の先生と施設の担当の職員さんが変わって、新しい担当の職員さんは、ちょっと気になることがあったら時間をとって話をしてくれた。」この職員さんとの出会いによって、子どもと関わる職業に憧れるようになった。
協力者B	「入所して半年くらいは、職員やほかの子どもとも全然話ができなくて、部屋に引きこもっていた」「でも、年度末に職員の移動があって、新しい職員が来たんだけど、すごいいい人でなんでも気楽に話しかけてくれたりして、その人にはなぜかすごい私も話せた」この職員との出会いによって施設での生活ががらりと変わり、施設での居場所を見つけられた。そのころから、社会福祉に興味を持ち、子どもに関わる仕事に就きたいと思うようになった。
協力者C	将来に対するビジョンもなかったので就職かなと思っていた自分に、高校の担任の先生が「もっと勉強した方がむいているし、大学に進んでみた方が絶対に楽しいから」と勧められ、大学進学を目指すようになった。高校の科目のなかで、化学や物理が好きだったことや、担任の先生からも、理系のほうが就職もしやすいとアドバイスをもらって、理系の大学を目指すようになった。

さらに、協力者Ｃは、「将来に対するビジョンもなかったので就職かなと思っていた自分に、高校の担任の先生が大学進学を勧めてくれた」と語っており、高校の担任の先生との出会いが進路選択のターニングポイントとなっている。この場合も、協力者Ａ・Ｂと同じ「たまたま」という偶発的な出会いがＣの進路選択に影響を与えていると考えられる。

協力者ＡおよびＢの進路選択のきっかけとなった職員の支援に共通点があった。職員の支援に関しての語りのなかで、「ちょっと気になることがあったら時間をとって話をしてくれた」「なんでも気楽に話しかけてくれた

りして、その人にはなぜかすごい私も話せた」と語られている。協力者ＡやＢに対する職員の親身になって関わろうとする姿勢や態度によって協力者Ａ・Ｂの気持ちを動かし、このことが将来像の拡張支援となっていると考えられる。

(3) 将来像の実現支援（表５）

協力者Ａの施設では、先輩たちのほとんどは就職であったが、職員さんがＡの性格を分析して進学に賛成してくれ、応援してくれた。職員による具体的な応援の内容としては、「大学の説明会にＡ本人と職員とで参加したり、職員たちの出身大学の話を聞いたり、施設長からも大学の色々な話をしてもらった」。これらの支援によって大学という具体的なイメージがもてるようになったと語っている。

協力者Ｂは、「卒園者の多くが大学へ進学していることを知り、職員から大学に関する情報を教えてもらった。園長先生からも大学入学手続きや奨学金のことを教えてもらい、興味を持つようになった」と語られている。

協力者Ｃの施設では、経済面の心配から大学進学には反対の考えをもっているようである。ただ、大学進学者がいない状況ではなく、毎年一人ぐらいが進学していたが学力面から私立大学に限られていたようである。そのようななか私立大学に進学したのは、経済的なバックアップがある者だけだった。経済的支援の有無によって「進路の選択肢が狭められていた」と語られている。本人の希望ではなく、経済状況から進路選択を強いられていると考えられる。進路選択に際して、「経済的な困窮が命取りになる…」という施設側の考えは、子どもたちのことを心配しての強い思いとして受け止められる。

しかし、経済的支援を含め進学に関する社会資源の情報を職員が把握し活用まで導いていけるかどうかが、子どもたちの進路を大きく規定してしまうことが示唆される。将来像の実現支援として、児童養護施設退所者の大学等への進路を保障するためには、児童養護施設が持つ進学に関する社会資源によって格差が生じない対策が必要と考える。

5．まとめと今後の課題

本研究の結果から、以下のことが明らかになった。

第一に、インタビュー調査から大学等への進学を希望する児童養護施設入所児が少ない要因の一つに、「施設の先輩の進路モデル」が関係しているということがわかった。

第二に、調査協力者たちは、最初から進学を決意していたわけではなかった。進学を希望する動機となったのは、施設職員や高校の担任の先生との「たまたま」の出会いによってであることがわかった。

表５　将来像の実現に関する語り

協力者Ａ	この頃（高２）から進学を意識し始めた。「施設の先輩たちは、高校を卒業して就職という先輩がほとんど」であったが、施設「職員さんが自分の性格的に高卒で就職ではないかなという思いが多分あったのか、なんかわりと周りは応援してくれた」進学した先輩が少ないため、「職員さんも手探りで一緒にやっていく感じだった」。大学の説明会に職員さんと参加したり、職員さんたちの出身大学について教えてもらった。施設長さんからも大学の色々な話をしてもらった。その話を聞いて大学という具体的なイメージがもてるようになり、自分の性格にあった大学を選択することができた。大学進学に関して、離れて暮らしている保護者からの理解を得られ、学費をすべて持ってくれることとなった。大学進学をきっかけに再び保護者と生活することとなった。
協力者Ｂ	将来の夢はできたものの、そのためにどうするのかは特に考えず携帯電話を買うためだけにアルバイトを頑張った。大学に行きたいと思っていたけれど、お金のことはまったく考えていなかった。高３の春頃、社会福祉の勉強ができる大学を職員から教えてもらった。そして、同じ施設の卒園者もたくさんその大学へ進学していることを知った。その後、園長先生から入学手続きや奨学金のことを教えてくださり、興味を持つようになった。
協力者Ｃ	「両親がまったく勉強に興味ない方で、大学っていうビジョンが自分のなかになくて、受験大学をなかなか決めきれなかった」。そんな時も、高校の担任の先生が色々大学を探してきてくれて、だんだんと大学が絞られてきた。しかし、施設側は、「高校卒業後に働いて、お金を貯めてから大学に入学すればいい」と言い、大学進学には反対であった。当時、施設では１年に一人程度大学へ進学していたが、すべて私立大学だった。私立大学に進学できる人は限られている人で、施設にいても兄弟が社会人でお金を出してくれる人とか、経済的なバックアップがなければ認められなかった。だから、「経済的な支援がなければ、みんな就職っていう感じだった。選択肢が狭められてた」。「経済的な困窮が命取りになるっていう考えで、進学を強制的にあきらめさせるみたいな姿勢だった」。

第三に、進学に関する社会資源の情報を施設職員が把握し活用まで導いていけるかどうかが、子どもたちの進路に大きな影響を与えていることがわかった。さらに、施設によって進路選択に対する考え方に大きな違いがあった。

第四に、それぞれの児童養護施設によって進路選択に対する考え方に大きな違いがあることがわかった。そのため、児童養護施設は進路支援についてどのような方針をもち、大学等進学実現率はどのようになっているのか調べる必要があるといえる。

また、多くの大学等進学者を輩出している場合とそうでない場合とではどのような支援の違いがあるのか捉えることも重要である。

そして、今回の調査協力者は、すでに児童養護施設を退所した者だったが、現在進路選択中の高校生は進路選択についてどのように考えているのか、そして、彼らを支援する職員は進路選択や進路支援についてどのように捉え考えているのかについて調査することも必要である。

今回のインタビュー調査は社会的養護のもとで暮らす高校生を対象とした大学等助成金制度説明会に参加した３名の児童養護施設退所者と限られており、この結果がすべての児童養護施設退所者の声を代表するものとは言えない。今後は、インタビュー協力者を増やし、大学等進学を希望し実現した場合だけではなく、希望したが実現できなかった事例についても分析していきたいと考えている。

本研究は、2016～2018年度科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）「児童養護施設退所者の後期高等教育の進路の保障」の成果の一部である。

引用文献

加藤一政（2003）児童養護施設における自立支援の課題と展望.福祉社会研究，(3)，78-90.

谷口純世（2011）児童養護施設における子どもへの自立支援．愛知淑徳大学論集福祉貢献学部篇，(1)，107-116.

吉村美由紀（2011）児童養護施設における大学等進学の課題－高校生・職員の意識調査から－．子どもと福祉，4，132-139.

越後美由紀（2011）児童養護施設退所者の高校卒業後の進学における考察－進学に至ったプロセスの視点から－．名古屋芸術大学研究紀要，32，19-31.

厚生労働省（2016）社会的養護の現状について.

厚生労働省（2014）社会的養護の現状について.

厚生労働省（2013）児童養護施設入所児童等調査結果の概要.

ベネッセ教育総合研究所（2015）第５回学習基本調査.

中部学院大学・中部学院大学短期大学部　研究紀要第18号(2017) 113－118

Issues of Social Independence in Children's Care Homes
― About Continuing on to Higher Education ―

Kiyoe　HIRAMATSU

Abstract：This research is a comparative study of the paths taken by children leaving foster care after graduating high school and the number of such children who want to continue on to higher education, which is compared to the total number of high school graduates who actually continue on to higher education nationwide. Also, it ascertains the selection of paths by the children on leaving foster care facilities and clarifies the status of the support for them to select a path to continue on to higher education. Publicly available materials were used on the trends in paths chosen by students after graduating high school, the ratio of students who wish to continue on to high school and university, and the ratio of students who actually do so. An interview survey was conducted in order to understand the process by which they select a path for the future. Semi-structured interviews lasting approximately one hour were conducted, and interview records were prepared and analyzed.

These results seemed to show that one of the reasons that few of these children wanted to continue on to higher education, such as to college, relates to "the model of the path taken by other children who left the foster care facilities before them." Also, the participants in these interviews had not necessarily initially decided to continue on to higher education, and in some cases, their motivation to do so came from chance meetings with foster care facility staff members. Finally, the results suggest that whether or not the foster care facility staff members understand the information and social resources on continuing on to higher education to the extent that they utilize it to guide the children greatly determines the paths these children choose.

Keywords：Children's home, Social Independence, Continuing on to higher education,
the process of selecting a path for the future, support for selecting a path